

福井駅周辺の現状について

まとめ

1. 産業の動向

(1) 全体の動向

- 中心市街地において、事業所数、従業員数ともに減少し、対市シェアも減少を続けている。中心市街地以外への業務機能の流出が続いていると考えられる。
- 業種別では、小売業・飲食店の従業員が H3 年から H18 年にかけて約 3 千人減少している。
- 金融・保険業の従業員は、H3 年から H18 年にかけて 53% に減少している。一方で、サービス業は他の業種に比べ減少幅が小さい。

- 事業所数の推移、従業員数の推移 (図 1、図 2)
- 中心市街地の業種別の従業員数の推移 (図 3)

(2) 商業の動向

- 年間販売額、対市シェアの低下が見られ、特に、H9 年から H14 年にかけて 174 億円と大きく減少した。これは、H12 年のエルパの開業など商業施設の郊外立地が進んだ影響などによって、商業機能の空洞化が進展したと考えられる。
- 空き店舗数も増加しており、新栄商店街などにおいて空き店舗が目立つ。これらの場所では、建物の老朽化が進んでおり、商店街の魅力が低下している状況である。
- 駅前には大型百貨店に対する要望が最も多いが、一方で、日用品や電化製品などが不足しているとの回答が多く、日常的に必要な商品が買えない状況になっていることがわかる。
- アンケートによると、普段の買い物場所は、郊外ショッピングセンターが 53% と最も多くなっており、駅前が 31% である。
- 駅前には月に 1～3 回の頻度で訪れる人が多く、特に西武等の特定の店舗での買い物に集中していることから、買い物客の回遊性も低いことが伺える。
- 中心市街地への買い物頻度を年代別（女性を対象としたアンケート）に見ると、10 代と 50 代以上が高く、車に乗れない人などが公共交通等が便利な中心市街地へ買い物に来ていることが予想される。

- 年間販売額の推移 (図 4)
- 空き店舗数の推移、空き店舗調査 (図 5、図 6)
- 駅前に不足していて充実してほしい商品/店舗 (図 7)
- 普段の買い物場所 (図 8)
- 訪れた中心市街地の施設 (図 9)
- 1 ヶ月間に訪れた頻度 (図 10)
- 一人あたり年間買い物日数 (女性対象) (図 11)
- 年代別一人あたり年間買い物日数 (女性対象) (図 12)

(3) 不動産の動向(地価、土地利用)

- 地価については、中央 1 丁目の駅前電車通りにおいて、H20 年はピークである H4 年の 1/8 の水準にまで下落している。
- 低未利用地は増加傾向にあり、その大部分が平面駐車場となっている。これらの敷地は、順化、中央 2 丁目などにおいて、比較的小規模で、ごま塩状に点在している。

- 地価の推移 (図 13)
- 低未利用地の推移 (図 14)

2. 人のにぎわいの状況

(1) 中心市街地への来街者の動向

- 中心市街地へのトリップ数は 6 万 5 千(H 元年)から 4 万 1 千(H17 年)になっており、来街者が減少していることがわかる。
- 中心市街地への来街目的としては、業務や官公庁への割合が多いことがわかる。
- 歩行者通行量は、駅前電車通りの通行量が多く、賑わいの主要な動線となっている。
- プリズム、AOSSA のオープンを契機として、駅前電車通りの 3 地点については増加した。

- 中心市街地へのトリップ数の変化 (図 15)
- 目的別の割合 (中心市街地ゾーン) (図 16)
- 歩行者通行量 (H20 年 7 月調査) (図 17)
- 歩行者動線軸 (3 地点) の歩行者通行量の推移 (図 18)

(2) 居住人口の動向

- 中心市街地の人口は減少が続いている。
- 年齢別人口では、幼年人口、生産年齢人口の減少が著しく、主にファミリー層が世帯分離等によって転出していると予想される。
- 高齢化率については、約 31.9% と、福井市全体 (22.7%) に比べ非常に高い状況である。
- これまでの分譲マンションの建設によっては、局所的な人口増加があるものの、中心市街地全体の人口増加には寄与していない。しかし、今後、さらに多くの分譲マンションの供給が予定されていることから、ある程度の人口増加が見込まれる。

- 中心市街地の居住人口の推移 (図 19)
- 年齢別人口の推移 (図 20)
- 共同住宅の供給状況 (図 21)

3. 公共サービスの状況

(1) 公共公益施設の現状

- 公共公益施設の郊外化が進展しており、この 10 年ほどの間に、大型の施設 (県立図書館、県立音楽堂、福井市美術館など) が、広大な敷地内に駐車場を備えた施設として郊外立地した。
- 桜木図書館の利用者数は、他の市立図書館の利用者数に比べ多くなっており、公共公益施設の立地の重要性を示唆しているといえる。
- アオッサの年間の来館者は、H20 年度が約 190 万人、H19 年度が約 160 万人であり、一日あたり約 4 千人を超える集客の核となっている。
- アオッサ、桜木図書館とも、月別に見ると 8 月の入館者が多くなるが、夏休み期間であるため、高校生などの学生の利用者が増加することが原因と考えられる。
- 響のホールについても、年間 8 万人を越えており、中心市街地の文化の活動拠点として安定した集客を維持している。
- 駅前にほしい施設のアンケートでは、休憩施設、レジャー娯楽施設、博物館・図書館などの意見が多く、休日等にゆったり時間を過ごせる施設へのニーズが高いと考えられる。

- 福井市中心部の公共公益施設 (図 22)
- 郊外立地した主な公共公益施設 (図 23)
- 市立図書館の利用者数の比較 (図 24)
- アオッサ、桜木図書館、響のホールの入館者数 (図 25、図 26)
- 駅前に欲しい施設 (図 27)

(2) 公共交通・交通手段の動向

- JR 福井駅および福井鉄道 (路面区間) の乗車数は、減少が続いていたが、H17 年からは増加傾向にある。
- えちぜん鉄道も、新駅設置など様々な取組みの結果、H19 年には運行停止前の水準を回復している。
- すまいるバスの利用者数も順調に増加しており、中心市街地へ買い物等に出かける市民の足として定着している。
- 交通手段は、福井市全体としては、自動車利用割合が大きく増加した。中心市街地における交通手段は大きな変化はない。

- 公共交通乗車数 (JR 福井駅、福井鉄道、えちぜん鉄道) (図 28、図 29、図 30)
- すまいるバス乗車数 (図 31)
- 移動に関する交通手段の割合 (パーソントリップ調査、図 32)